

# 教宣 せぶん

## 物の価値、人の価値、人生の価値

先日、テニスコート内でこんな会話がありました。

「あ！ラケット、買ったんだ？ヨネックスの最新モデルだね。いいな～。いくらだった？」「テニスショップ で、ガット張ってもらって33,500円」え？それならインターネットで、26,800円で売ってたよ」「え～、そんなに安く売ってるの？高い買い物をしてしまったよ。」

とかくありがちな会話ですが、傍らで聞いていて「物の価値って、買った時には決まらないのに」と思いました。確かにお金って貴重ですから、購入時に少しでも安く買いたいと思うのは人間の心理です。しかし、その買った品物が「安い買い物だったか？」「高い買い物だったか？」は、その人がその品物を「どう使ったか？」で決まるはずです。26,800円で買ったラケットでも、自分の打法やプレースタイルに合わなければ、すぐに「新品」が欲しくなります。手入れもせずに放置しておけば、すぐに傷んでしまいます。またテニスから興味がなくなれば、家でホコリまみれになってしまうでしょう。しかし、33,500円で買ったラケットでも、ラケットの特徴を生かした打法を身につけ、愛着を持って大切に使用すれば、10年でも、20年でも使えます。どちらが安い買い物をしたでしょう？どちらが高い物を買ってしまったでしょう？その物の「価値」や、「損得」は、決して「買った時の価格」では決まらないと思います。

これと同じことが、私たちのいま迎えている局面でも言えるのではないのでしょうか？

全損保に所属していたら「転身支援金がもらえない」という宣伝を、狡猾な東海経営がオオピラにしています。中立な第三者機関の都労委の判断のように「もらえないことなどありえない」わけですが、万が一もらえなかったとしても、その人が「損をしたか」「得をしたか」は、その時点では決まらないはずで、その人がその後の人生をどう生きたかによって、その金の価値、その人の価値、その人生の価値は決まってくるはずで、一時金としていくらかの金は手に入れたが、心を許せる仲間は去っていき、後ろめたさを抱えながらその後の人生を暮らすのと、金はもらえなかったが、心に一天の曇りもなく、共に

汗を流した心を許せる仲間がいて、定期的に杯を傾ける人生と、どちらが価値あるでしょう？どちらがゆたかだと言えるでしょう？

また、全損保に所属して会社を「提訴」した人の人生でも同じことが言えます。負ける裁判だとは全然思っていないが、万が一私たちの主張が受け入れられず、第2の人生を送ったとしても、金には替えられない価値がその人生には待っているでしょう。朝日闘争を最後までたたかった原告団の方には、たたかいて通して多くの仲間や支援者がいて、「さあ」と言えばすぐに集まれる絆を持っています。私たちの集会やたたかいにも必ず顔を出してくれて、言葉をかけてくれます。朝日火災で普通に定年を迎えられた方と比べたら、どちらが心を許せる仲間をたくさん持っているでしょう？朝日提訴団の方の存在そのものが私たちに計り知れない勇気を与えています。存在そのものが社会から求められています。

人生に、そういった金には替えられない価値観を見出している人には、同じような価値観を持った人が集まってくるものです。その人生は、出世欲や金銭欲に目がくらんだ人からは理解できない「ゆたかさ」があります。逆に出世欲や金銭欲に目がくらんだ人には、おもしろいもので、同じ価値観を持つ人が集まってきます。その人間関係は、「欲」がベースにあるので、どこかギスギスとして、「情」とは縁遠いものになるでしょう。

自分の回りにいる人たちがどんな価値観や人間関係を持っているでしょう？一度観察してみてもいいでしょうか？

そして、狡猾な東海経営の回りには、どんな人たちが集まっているのでしょうか？一度想像してみてもいいでしょうか？